濃尾地震で被災した名古屋郵便電信局の建築について

STUDY ON THE BUILDING OF THE NAGOYA POST TELEGRAPH OFFICE SUFFERED
BY THE NOBI EARTHQUAKE平山 育男^{*1}

Ikuo HIRAYAMA

This article considered the building of the Nagoya Post and Telegraph Office and inspection of the damage caused by the Nobi earthquake. It's following points to become clear.

The false work of the building began in December, 1886, and they had the completion ceremony on January 28, 1888. The designer of this building was considered to be *Satachi Shichijiro* conventionally, but as the employment to Ministry of Communications of *Satachi* was from February, 1887, I think that the design was started before it. The brick used in this building was made in *Gifuken Kangoku*.

Keywords : *the Nobi earthquake, Satachi Shichijiro, the Nagoya Kenchiku Kaisya, Gifuken Kangoku*

濃尾地震, 佐立七次郎, 名古屋建築会社, 岐阜県監獄

1. はじめに

明治24(1891)年10月28日に発生した濃尾地震は近代の日本に建てられた煉瓦造建築に対し衝撃的な被害をもたらした、その象徴の1つとも言える建物が本稿で扱う名古屋郵便電信局である。

名古屋において郵便役所が最初に設置されたのは鉄砲町に役所が開かれた明治4(1871)年12月で、明治8(1885)年に呼称は郵便局と改められ^{注1)}、これとは別に明治5(1882)年9月、名古屋電信局が隣接して設けられた^{注2)}。明治19(1886)年には両局が合併し名古屋郵便電信局となり、明治19(1886)年8月に名古屋電信建築署が設置され、これを2年後になって名古屋郵便電信局が事業を兼掌した^{注3)}。そして名古屋郵便電信局は上記の組織改編を踏まえ、明治21(1888)年に現在の名古屋市中区栄町3丁目に新築された^{注4)}。

ところで、筆者はこれまで濃尾地震の被災地へJ・コンドルが赴き調査報告をまとめた“AN ARCHITECT'S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891.”(以下、“NOTES”とする)^{注5)}の検討を進めているが、同書でコンドルは名古屋郵便電信局についても言及している^{注6)}。濃尾地震による名古屋郵便電信局の被害は特に大きく、この建物についてはコンドルを始め、後述のように渡辺謙、中村(佐藤)

勇造ら調査をして記録を残すが、建物の建築経緯、施工者など未詳の点も多い。そこで本稿は名古屋郵便電信局建物の工事日程、設計者、施工者、工事費などについて明らかにすることを目的とする。

2. J・コンドルによる名古屋郵便電信局の調査報告

コンドルは名古屋に到着直後に名古屋郵便電信局を調査した^{注7)}。まずは、“NOTES”における当該部分を以下に引用する^{注8)}。

Arriving at Nagoya, the brick buildings received first attention, their damage having been attended with the most serious results. The Post and Telegraph Office, a high brick structure of two stories, showed a large length of the wall of its upper story fallen from the cornice to the sills of the upper windows. The chimney stacks above the roof-line had crashed through the roof and upper floors, making large square holes through which some of the roof and floor timbers had fallen. The metal-covered roof and lantern, of triple span, belonging to a large Sorting Office, which roof was supported on four hollow cast iron columns, had fallen in,

^{*1} 長岡造形大学造形学部 教授・博士(工学)、博士(造形)

Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

the outer wall being pushed out; but the columns remaining standing. One portion of the two-story building at the end of the South wing, which was divided by cross walls of brick, and tied across the top by means of a brick vault, had not fallen.

This building had been erected by a local firm of contractors, and was reported to have been completed at a price of six or seven thousand *yen* below the original Government estimates: it was about four years old. An examination of the structure showed that the outer walls of the lower story were two bricks in thickness and those of the upper story one brick and a half. The total height of the walls to the cornice was from thirty-two to thirty-three feet. There existed only a few cross walls which were of large span, one brick and a half thick below, one brick thick above, and placed about 60 feet apart. The remaining external walls were framed in wood, but they were few in number, and, for the most part, the building was divided into offices of very large size. The floor beams were of minimum dimensions, shallowly and loosely let into the brick walls, their ends resting on stone templates, wooden wedges and shavings being in some cases driven between the stone and the beams to give them a level bearing. The outer $1\frac{1}{2}$ brick wall of the upper story had large windows, and no piers or cross walls for a length of sixty feet. On inspecting the fractures of walls it was found that they had nearly all occurred at the mortar joints. In fallen masses of brickwork only the bricks receiving supper-incumbent weight during the fall were broken. Perfect bricks were without difficulty detached from the brickwork, and such mortar as still adhered easily knocked off with a hammer, crumbling to powder in the fingers. An examination of portions of the walling still standing showed fissures in which the brickwork had separated at the mortar joints, leaving the mortar loose (see Fig. 1). In some cases the cakes of mortar in horizontal joints had been shot partially out, thus showing no adhesion to the bricks (see Fig. 1). In other cases loosened bricks had been partially shot out (see Fig. 2). Also, the brick voussoirs of arches had been loosened at the mortar joints and had dropped (see Fig. 2). Remaining standing was a smaller secondary building for service, also constructed in brick, and of two stories, but somewhat lower than the main building, with walls of limited span, and having smaller windows. A projecting cornice of plastered brickwork had been forced out on the North side by the action of the roof; the tile were loose,

and the roof bent, but there were no other serious injuries.

Enquiries showed that most of the soil of Nagoya was red clay, with the exception of parts of the Citadel which had been filled in with made-ground excavated from the moats. The foundations of the Post and Telegraph Office building consisted of brick footings upon concrete trenches placed immediately upon the hard red clay.

The most apparent defects in these buildings were as follow: - The thickness of external brick walls had been reduced to a minimum. Cross walls of brick were rare, and in some cases occurred only at distances 60 feet apart; these were also of minimum thickness. The outer walls of the upper story being one brick and a half in thickness had numerous large windows, reducing considerably the area of the brickwork, without piers or cross walls, and heavy granite dressings with little bond were added to these windows. Floors were loosely and defectively constructed. Important transverse walls and certain cross walls were of timber, roughly framed, without diagonals. The mortar was totally defective, having no cohesion in itself, and no adhesion to the bricks, being indeed but a little better than clay or mud.

[和訳] 名古屋に到着すると煉瓦造建築が最初に目に入り、被害は最も深刻な結果を伴っていた。軒の高い2階建煉瓦造の郵便電信局は、上階の壁がコーニスから窓敷居まで広範囲に崩れ落ちていた。屋根の上の煙突は、屋根や2階床を突き破り大きな四角い穴を開け、そこに屋根や床材が崩落していた。柱間3間となる金属製で明かりとりの窓を持つ屋根の掛かる大きな仕分所では、4本の中空鑄鉄の柱で支えられていた屋根が崩落し、外壁が押し出されたものの、柱だけはそのまま立っていた。南棟の端部に位置する2階建の一部は煉瓦造の間仕切壁で隔てられ、煉瓦造のアーチ天井であったが、崩落してはいなかった。

この建物は地元の建設業者が建設し、当初の政府予算より6~7000円の低価格で竣工したという報告があり、地震時は築4年程であった。建物を調査したところ、1階部分の外壁は煉瓦2枚積、2階部分は1枚半積であった。壁全体の高さは、コーニスまで32-33フィート[9.8-10.1m]であった。間仕切壁はほとんど存在せず、梁間が広く、下部は1枚半積、上部は1枚積の厚さで、壁間は約60フィート[18.3m]であった。現存する外壁は木骨構造であるものの木材の数は少なく、多くの部屋は面積の広い事務室に分割されていた。床梁は最小限の径で、掛かりはわずかで固定されず煉瓦壁へ納められ、端部は石造の梁受に置き、場所によっては木製の楔や、削りくずが水平を保つために石と梁の間に詰めてられていた。上層の煉瓦1枚半積の壁には大きな窓が、60フィート[18.3m]に渡ってあるが、ここには控壁も間仕切壁もない。壁の破損は、ほぼすべてモルタルの接合部で生じていた。煉瓦壁が塊で倒壊し崩壊する際、煉瓦だけが過大な荷重を受けたようだ。傷一つない煉瓦は、難なく煉瓦壁から取り出すことができ、付着したままのモルタルは、金槌で容易にたたき落とすことができ、指の中で粉々になった。煉瓦

がモルタル部分で分離し、未だ立ったままとなっている煉瓦壁の亀裂を調べると、モルタルが煉瓦から外れていた(参照:図 1)。ある場合では、水平方向の接合部で、モルタルの目地が部分的に突き抜け、煉瓦への接着物がないように見えた(参照:図 1)。他では、緩んだ煉瓦が部分的に突き出していた(参照:図 2)。また、煉瓦アーチの迫石もモルタル接着部で緩み、落ち込んでいた(参照:図 2)。倒れずに残った窓口業務のための小規模な付属屋は煉瓦造の 2 階建であるが、本館よりも幾分階高が低く、抑えられた柱間と小さめの窓がある。漆喰塗煉瓦壁の張り出したコーニス屋根は移動したことによって北側へ押し出されて瓦が剥がれ、屋根は曲がったが、他に深刻な被害はなかった。

調査によると、堀を掘って埋め立てられた名古屋城を除けば、名古屋のほとんどの土壌は赤土とみられる。郵便電信局の基礎部は、堅い赤土の直上に設置したコンクリート造の溝上に煉瓦の基礎を据えていた。

上述した建物の明白な欠陥は以下の通りである。外壁の厚さが最低限度である。間仕切壁が少なく、それも 60 フィート[18m]離れており、最低限の厚さであった。上階における 1 枚半積の外壁には、多数の大きな窓があり煉瓦壁の面積が削減され、控壁も間仕切壁もなく、窓には微量の接着剤によって重い花崗岩の装飾が加えられていた。床は固定されず、不完全な建築であった。重要な水平壁や特定の間仕切壁は木材で粗く骨組が組まれ、筋違はなかった。モルタルは全てが不良で、それ自体に粘着力がなく、煉瓦に対しての接着力もなく、実際、土や粘土よりはましな程度であった。

3. 名古屋郵便電信局の建物について

3-1 建築の経緯

・工事の開始

局舎の工事開始は、従来、定説を見ていない^{注9)}。ところで、既存の名古屋郵便局庁舎は明治 17(1884)年 7 月 17 日付『東海新聞』に
○郵便局改築 当名古屋郵便局は手狭にて事務上甚だ不便なるに付近々改築になる趣きにて既に其絵図面等を副へて其筋へ出願になりしと云ふ又た右普請中に本町三丁目松前家を借受け該家に於て該事務を取扱はるゝ由に聞く^{注10)}
とあり、明治 17(1884)年に図面を作成の上で実施された。

一方、今回問題にする名古屋郵便電信局の建物についての工事開始は、明治 19(1886)年 12 月 10 日付『扶桑新報』に

○改築場所の外囲 名古屋通信管理局及び電信局の改築場所へは本月中に仮外囲を施さるゝ見込なりと云ふ^{注11)}

とあり、続いて同年 12 月 17 日付『扶桑新報』には

○新築の標榜 名古屋通信管理局新築地即ち栄町当今秋琴楼の構へ地四隅の境界へ昨日より通信省用地と大書したる標榜を樹てられしが何れ二三日中には外囲にも着手さる由にて落成は凡そ一ケ年の見込なりと云ふ^{注12)}

とあるため、名古屋郵便電信局は、明治 19(1886)年 12 月中旬には仮外囲などの工事が開始され、建築の計画に基づき 1 年後の落成を考慮することができる状態であった。

・工事の竣功

下掲のようにこれまで名古屋郵便電信局の設計は佐立七次郎^{注13)}

によるものとされるが、佐立の死後、曾禰達蔵が編んだ年譜には

故正員 工学士 佐立七次郎君設計監督建造物

同 (明治:著者注)二十三年 名古屋郵便局^{注14)}

とされ、局舎の建築は明治 23(1890)年とされる。しかし、これは従来指摘される^{注15)}ように、年号に錯誤がある^{注16)}。

郵政省による『郵政百年史資料』において、名古屋郵便電信局は
完成:明治 21.1.- (推定)

構造:煉瓦造 2 階

設計:通信省 (佐立七次郎)^{注17)}

とする記載に留まる。一方、濃尾地震の被害を伝える『明治廿四年十月廿八日震災写真説明書』では

明治廿年二月起工全二十一年二月竣功《中略》当時在勤ノ佐立七次郎カ監督ヲ以テ築造^{注18)}

とあり、やや内容が異なる。ところで、名古屋郵便電信局の建築に関し、『建築雑誌』の明治 20(1887)年 12 月号には

正員佐立七次郎君ハ御用済ノ上同月二日帰京セラレタリ^{注19)}

とあり、佐立は明治 20(1887)年 12 月 2 日に“御用済”のため東京へ戻っている。工事は明治 20(1887)年内の完成を目指した^{注20)}が、12 月初旬には明治 21(1888)年 2 月 15 日までの工期延長願が出された^{注21)}。そして工事は 1 月下旬に終了し、1 月 27 日に大型電信機械を据え付け^{注22)}、28 日に落成式、29 日に開庁式、30 日に移転が行われた^{注23)}。そのため建物は明治 21(1888)年 1 月 28 日落成とできる。

3-2 設計者

名古屋郵便電信局の設計は、既に挙げた曾禰による年譜^{注24)}等によれば佐立七次郎とある^{注25)}。但し、安政 3(1856)年に生まれた佐立^{注26)}の経歴を詳細に見ると、これには問題が残る。

佐立は明治 12(1879)年に工部大学校造家科第 1 回卒業し工部省営繕局に入り、明治 13(1880)年 10 月鉱山局勤務、明治 16(1883)年 7 月海軍省へ転じ、明治 17(1884)年 5 月依願免官の上、藤田組へ入社し、明治 20(1887)年 2 月初旬になって通信省雇となっている^{注27)}。つまり、『明治廿四年十月廿八日震災写真説明書』は前掲のように名古屋郵便電信局の起工を明治 20(1887)年 2 月とするが、これは佐立の通信省入省とほぼ同時に名古屋郵便電信局の工事が開始されたことを示す。また、それ以前となる明治 19(1886)年 12 月の段階では敷地の仮外囲もなされ、完成時期を既に判断することもできた。

なお、佐立の前任として通信省で建築の業務に関わったのは新家孝正である。新家は工部大学校を明治 15(1882)年に卒業後、工部省へ入り主に皇居の造営に関わり、明治 19(1886)年 12 月に通信技手として入省し、明治 20(1887)年 3 月には依願免本官となった^{注28)}。つまり、新家の入省時に敷地の仮外囲が既になされたことになる。

ところで明治 18(1885)年 12 月における通信省設置前後における庁舎建物の建設は『郵政省百年史資料』27 によれば、明治 8(1875)年 6 月以後、官庁の建築は工部省が担当し、同省廃止の明治 18(1885)年 12 月以後、諸官庁の建築は臨時建築局が負ったとする。なお、同時期に発足した通信省は内部に技手などの技術者を抱え、明治 19(1886)年 1 月には会計局で省中の営繕を掌理した^{注29)}。

つまり、明治 19(1886)年 11 月 30 日現在の『職員録 甲』では、当時、通信省会計局に建築技術者の技師は在席せず、判任官七等に中島泉次郎^{注30)}、十等に野口愛信^{注31)}しか確認できず^{注32)}、翌年の明治 20(1887)年 11 月 30 日現在の『職員録 甲』で、ようやく建築を

担当する通信省会計局に四等技師の佐立、五等技手の佐伯知義、七等技手の中島、十等技手の野口を確認できる^{注33)}。一方、明治19(1886)年11月30日現在の『職員録 甲』では臨時建築局に技術官として四等技師松崎万長と妻木頼黄、一等技手渡辺譲、二等技手滝大吉と河合浩蔵、四等技手高山幸次郎を確認できる^{注34)}が、既に指摘があるように臨時建築局の主な目的は議院議事堂や諸官庁が建築対象で、技術者も少なく、通信庁舎の建築は考えづらい^{注35)}。

ところで、この組織改編前における大規模な通信庁舎の建築では、明治7(1874)年に竣工した木造の横浜郵便役所^{注36)}、明治20(1887)年頃とされる煉瓦造の神戸郵便局^{注37)}、明治15(1882)竣工の煉瓦造の日本橋電信分局^{注38)}など、比較的大きな都市の通信庁舎設計は工部省によっている。

以上より、名古屋郵便電信局の設計は佐立や新家が通信省雇となる以前に実施されていたと考えざるを得ず、制度的にそれを担ったのは工部省となる。また、江戸橋郵便電信局では、宮内省の片山東熊が受け継いだ事例^{注39)}もある^{注40)}。つまり、名古屋郵便電信局の場合も、工部省による建築案が事前にあり、これを新家、佐立と受け継いだと見ることができる。

一方、建物の施工監理は『建築雑誌』の記載からも佐立とするのが妥当である。明治20(1887)年4月27日付『金城たよ里』には

佐立通信属 全氏 は曩頃より神戸名古屋の両管理局新築御用に付本省より出張を命ぜられたるを以て神戸名古屋間を汽車にて奔走巡視せらるゝと云ふ^{注41)}

とあり、佐立は明治20(1887)年4月の段階で、神戸郵便電信局新築との掛け持ちであったことが分かる。また、既述のように11月末の段階でも佐立は名古屋を訪れ、更に落成間近の明治21(1888)年1月初旬頃における来名も確認できる^{注42)}。但し、現場に長く携わったのは当時、会計局に属した野口愛信で、移転も済んだ明治21(1888)年2月4日、野口のため局員らにより送別会が行われた^{注43)}。

3-3 平面

名古屋郵便電信局の建物平面の詳細を伝える資料として、渡辺譲が『工学会誌』に発表した平面図がある。これによると建物は北面する変形した逆h型で、西棟が長手124.48尺で短手34.48尺、中央部分が長手55.52尺で短手27.48尺、東棟が長手67.48尺で短手34.48尺となる。また、これとは別に後部に、集配人詰所及食堂とする梁間3間、桁行4間の2階建の建物があった。煉瓦壁厚は1枚で4尺ないし9尺の間隔で5寸角の木柱を立てたとする。更にこの東側に平家で桁行3間梁間9尺の煉瓦造^{注44)}があったとし、この被災写真が大垣市立図書館に所蔵される^{注45)}。

3-4 構造

佐藤勇造によると建物は

表桁行式拾間梁間七間共ニ矩折ニシテ間内広キハ三拾五坪狭キハ四坪、煙突四本、外側ハ磨煉化ニシテ壁下ハ並焼ナリ小屋ハ西洋小屋ニシテ葺物ハ瓦、勾配ハ六寸ナリ《中略》外側後壁ノ厚サハ階上階下

共ニ壹枚半^{注46)}

とあり、屋根は瓦葺で6寸勾配、部屋は35坪から4坪となる。また、被災前後の写真から屋根上の煙突は正面側に2本、両翼に1本ずつで合計4本、採光のドーマーウインドウは正面側に3ヶ所、中央には時計が設置され、両翼に各1ヶ所ドーマーウインドウを確認でき

る。なお、コンドルの記載によれば間仕切壁などは木骨造となる。

3-5 請負者

名古屋郵便電信局の工事について『近代日本建築学発達史』は“直営”と無記載を併記し、いずれも根拠は示さない^{注47)}。ところで名古屋郵便電信局新築工事の報道では、工事請負を示す記事を数々確認できる。先ず、明治20(1887)年1月26日付『扶桑新報』では

○工事の請負 名古屋通信管理局及び電信局の新築工事は悉皆大倉組にて受負ひ同組の役員田村豊助氏が専ら擔任^{注48)}

とある。記事で“田村豊助”とあるのは“田中豊輔”とするのが正しいだろう。人名に錯誤を含み、記事は同時期に名古屋で進んでいた第三師団指令本部の工事を指すとも考えられるが、この工事は既に明治19(1886)年11月に始まっており^{注49)}、2ヶ月遅れて報道されることは考え難い。報道は氏名の誤りを含むが、名古屋通信管理局及び電信局の新築工事を指すとすれば、工事は大倉組の請負により田中豊輔が担当となる。更に、翌日となる1月27日付『扶桑新報』には

○煉化石の請負 今回栄町に新築工事最中なる通信管理局が煉化石を以て構造さるゝ事は予て聞き及びしが今其用材なる煉化石百万個及び屋瓦二拾万枚ハ岐阜県監獄署の製造に係る者を岐産商会の手を経て太蔵組一手にて請負ひたり^{注50)}

との記事がある。ここで岐産商会^{注51)}は未詳であるが、“太蔵組”とは前日の記事から大倉組と判断できる。なお、この記事だけでは大倉組が煉瓦の調達だけを請け負った、とすることもできる。但し、明治20(1887)年12月10日付『金城たよ里』には

○落成の日延 本区栄町なる通信省の新築落成は本年中に竣功しがたきの見込が立ち請負人たる大蔵組の頭取より出願し来二月十五日迄日延の義を聞済になりしやに聞きぬ^{注52)}

とある。つまり、この記事では工事最終盤となった明治20(1887)年12月10日の段階で、“請負人たる大蔵組の頭取”から“落成の日延”が出たことを伝える。なお、“大蔵組”とは“太蔵組”、つまり大倉組とするのが妥当である。ここでは上記の記事から大蔵組が請け負った煉瓦調達の遅れとも考えられるが、工事も最終盤で、その可能性はない。つまり、上述の3記事より、名古屋郵便電信局は請負工事で請負者は大倉組(＝太蔵組＝大蔵組)とすることができる。

なお、大倉組は明治20(1887)年3月に日本土木会社との認可を受けた^{注53)}が、記事では旧称が継続して用いられたと判断する。

3-6 施工者

一方、コンドルは“NOTES”の名古屋郵便電信局の部分において施

Fig. 1. The Plan of Nagoya Post Telegraph Office
名古屋郵便電信局平面図 『工学会誌』122、61頁

工業者を“地元の建設業者が建設”^{注54)}とする記載に留まるが、“NOTES”後段における名古屋紡績会社の項目において

It was built by the Nagoya Kenchiku Kaisha, the builders of the Post and Telegraph Offices, from the designs of a Cotton Mill engineer.

〔和訳〕建物は紡績会社の技師による設計で、郵便電信局の施工者でもある名古屋建築会社により建設された^{注55)}。

と記載し、名古屋郵便電信局は名古屋建築会社の施工とする。実際、現場では明治20(1887)年9月22日に足場が崩れ、名古屋建築組の工夫が転落し負傷した報道がある^{注56)}。

つまり、工事は大倉組の請負であったが、この下で施工は名古屋建築会社が当たったとすることができる。

なお、名古屋建築会社は橋町に本社を置き^{注57)}、資本金30万円で建築請負を業務とする会社で、服部小十郎が社長を務め^{注58)}、明治20(1887)年4月頃に設立された^{注59)}。材木商^{注60)}であった服部は万延元(1860)年の生まれで、後には衆議院議員も務めた^{注61)}。

3-7 煉瓦の製造者

この建物の煉瓦製造者をコンドルは言及しないが、この点は前掲した明治20(1887)年1月27日付『扶桑新報』における“煉化石の請負”とする記事において、岐阜県監獄で生産された煉瓦100万個と屋根瓦20万枚が用いられたとある^{注62)}。なお、岐阜県監獄による煉瓦の生産は、明治19(1876)年6月26日付『絵入扶桑新聞』に

○計画中 本県士族の山崎次郎氏には今度岐阜県監獄署に於て煉化石を製造し当鎮台へ三ヶ年間之れを売込むの約束を結はんと昨今同氏は其事に熱心計画中の由^{注63)}

とあるように、名古屋郵便電信局と同時期に工事が進んでいた第三師団司令本部でも使用が計画され、明治19(1876)年12月18日号『絵入扶桑新聞』に

岐阜県監獄製造の煉瓦ハ其質善良なるに付き過般当鎮台本部建築用に入るゝ筈に約定されしが尚ほ又た今回陣営經理部へ岐阜県監獄の係員鈴木吉造氏ハ出頭せられ瓦も善良なるより数万個去る十四日購求の約を結はれたりとか^{注64)}

とあり、第三師団司令本部では煉瓦と瓦の納入が確認できる。但し、明治25(1892)年の『岐阜県統計書』では、岐阜県監獄署における煉瓦製造は確認できず^{注65)}、同署での煉瓦製造は短期間と考えられる。

3-8 工事費と坪単価

『各省所管官有財産目録』下巻で名古屋郵便電信局の建坪は380.261坪、工事費は29,260.165円で、これは28.697坪の煉瓦造建物も含む408.958坪に対し^{注66)}とする^{注67)}。坪単価は71.55円となるが、妻木頼黄も同局の坪単価を“七拾円位”と報告する^{注68)}。

なお、コンドルは“NOTES”において名古屋郵便電信局が当初の政府予算より6～7000円の低価格で竣工したという報告があった^{注69)}とするため、当初予算は35,000円程度、坪単価は87円程となる。

4. 濃尾地震後の名古屋郵便電信局の建物

濃尾地震の被災後、名古屋郵便電信局の仮庁舎新築費として明治24(1891)年11月14日、2500円の勅裁があり^{注70)}、庁舎は木造2階建で建築された^{注71)}。一方、震災後の本建築は明治26(1893)年4月に木造の建物が中島泉次郎の設計で建築された^{注72)}。

5. さいごに

濃尾地震で被災した名古屋郵便電信局の建物について考察を行ったが、明らかとなるのは以下の諸点である。

- 1) 名古屋郵便電信局は、明治19(1886)年12月には仮設工事が始まり、1年後の落成を考えることができる状態であった。そして明治21(1888)年1月28日に落成式があった。
- 2) 名古屋郵便電信局の設計者は従来、佐立七次郎とされる。但し、佐立の通信省雇は明治20(1887)年2月からのため、工事の進行から、それ以前から設計がなされていたと考えるのが妥当である。施工監理に佐立は関わったが、現場に長く野口愛信が携わった。
- 3) 名古屋郵便電信局の請負は大倉組で、その下で施工はコンドルも記すように名古屋建築会社と考えられる。
- 4) 名古屋郵便電信局に用いられた煉瓦と瓦は岐阜県監獄署において製造がなされた。
- 5) 名古屋郵便電信局の工事費は29,260.165円で坪単価は71.55円となるが、これは当初予算より6～7000円の低価格で竣工したとする。

参考文献

- 1) J. Conder: AN ARCHITECT’S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891., Seismological journal of Japan18, pp.1-91, 1893.12
- 2) Sugiyama, H.: Nagoyayuibindensinkyoku, Kentikugizyutu No.604, pp.228-239, 2000.6(in Japanese)
杉山英男：名古屋郵便電信局，建築技術604，pp.228-239，2000.6
- 3) Koyama, S.: Meiji-Taishyokinoteisinkentikunokenyaku, private edition, 2013.5(in Japanese)
古山精一：明治・大正期通信建築の研究 モダンイズム期以前の局舎と技術者達，自家本，2013.5

注

- 注1) 名古屋市役所：名古屋市史政治編3、451～455頁、大正5(1916).2
- 注2) 名古屋市役所：名古屋市史政治編3、460～461頁、前掲
- 注3) 名古屋市役所：名古屋市史政治編3、461頁、前掲
- 注4) 通信省：通信事業史7、789頁、昭和15(1940).12
- 注5) 参考文献1)
- 注6) 参考文献1) 25頁
- 注7) 平山：J.コンドルによる濃尾地震被災地の調査地と日程について、日本建築学会計画系論文集719、190頁、平成28(2016).1
- 注8) 参考文献1) 3～6頁。以下の引用も同じ頁となる。
- 注9) 参考文献2) 233頁
- 注10) 東海新聞社：東海新聞、明治17(1884).7/17、2頁
- 注11) 共同印刷会社：扶桑新報、明治19(1886).12/10、2頁
- 注12) 共同印刷会社：扶桑新報、明治19(1886).12/17、2頁
- 注13) “佐立”の読みは、土崎紀子・沢良子：建築人物群像資料編、62頁及び建築人物群像資料編、61頁、住まいの図書館出版局、平成7(1995).4、により“さたち”を採り、ローマ字では“Satachi”とした。なお、柳本優己、越野武、角幸博、池上重康：佐立忠雄(1886～1952)と小樽和光荘、日本建築学会北海道支部研究報告集73、335～338頁、平成12(2000).7、では佐立の息子、佐立忠雄に対し“Tadao Satachi”とする。
- 注14) 曾禰達蔵：故正員工学士佐立七次郎君の建築事蹟、建築雑誌446、382頁、大正12(1923).8
- 注15) 参考文献2) 229頁
- 注16) 向井寛：通信建築年表、11頁、平成20(2008).3、では、設計者とされる佐立七次郎が、“明治21年から1年3ヶ月、郵便および電信局舎建築の研究のため欧米への出張を行っている。《中略》帰国後、名古屋郵便電信局《中略》などいずれもルネッサンス様式の建物を設計している。”とする。但し、名古屋郵便電信局の完成を明治21(1888)年1月とすれば、建築後の出張となる。この錯誤は前出の“故正員 工学士 佐立七次郎君設計監督建造物”の記載によるものと考えられる。
- 注17) 郵政省：郵政百年史資料27、41頁、昭和46(1971).3
- 注18) 愛知県警察部：明治廿四年十月廿八日震災写真説明書、1頁、明治24(1891).12

注19) 造家学会：建築雑誌 12、205 頁、明治 20(1887).12

注 20) 金城新聞社：金城たよ里、明治 20(1887).12/08、3 頁。“通信管理局 目下当区にて新築中なる全局は来る十五六日頃まで悉皆落成せしめんと此 程更に大工職等のものへ告達ありし由にて近來は殊に工事を急ぎ居ると云 ふ ”とある。

注 21) 金城新聞社：金城たよ里、明治 20(1887).12/10、3 頁。“落成の日延 本区栄町なる通信省の新築落成は本年中に竣功しがたきの見込が立ち請負 人たる大蔵組の頭取より出願し来二月十五日迄日延の義を聞済になりしや に聞きぬ”とある。

注 22) 金城新聞社：金城たよ里、明治 21(1888).1/28、3 頁。“名古屋通信管 理局の電信科へ去る廿六日東京より電信の大器械が到着《中略》昨日右器 械を新築局へ組立られ本日の縦覧に供せらるゝとの事なり”とある。

注 23) 金城新聞社：金城たよ里、明治 21(1888).1/22、2 頁及び 2/1、2 頁。

注 24) 曾禰達藏：故正員工学士佐立七次郎君の建築事蹟、建築雑誌 446、382 頁、大正 12(1923).8

注 25) 参考文献 2) など

注 26) 土崎紀子、沢良子：建築人物群像 資料編、61 頁、平成 7(1995).4

注 27) 曾禰達藏：故正員工学士佐立七次郎君の建築事績、建築雑誌 446、379 ～380 頁、前掲

注 28) 造家学会：故正員工学博士新家孝正君略歴追加、建築雑誌 443、220 頁、大正 12(1923).5

注 29) 通信省：通信事業史 7、298～302 頁、前掲

注 30) 中島の履歴については、日本建築士会：故正員従四位中島泉次郎君 肖像・略歴、日本建築士 33-2、30～31 頁、昭和 18(1943).8、にあり、こ こで名古屋郵便電信局に関与は記されない。また、宮本雅明：日本の大学キ ャンパス成立史、156～163 頁、九州大学出版会、平成元 (1989) .4、には 明治 20(1887)年初頭まで中島は事務処理を担当し、以後、建築教育を個人 的に滝大吉、吉井茂則、片山東熊に受け、徐々に建築工事の實際を学んだ と考察している。そのため、明治 20(1887)年における中島による名古屋郵 便電信局の設計は考えられない。

注 31) 野口の通信省在任中における職位は中島泉次郎よりも低く、明治 20(1887)年における野口による名古屋郵便電信局の設計は考えられない。

注 32) 内閣官報局：職員録 明治 19(1886)年 甲(官報 1049 附録)、317 頁、 明治 19(1886).12/27。なお、郵政省：郵政百年史資料 27、346 頁、昭和 46(1971)3、では通信省会計局における中島、野口の在席を明治 19(1886) 年 12 月現在とするが、これも『職員録』による、とあるため明治 19(1886) 年 11 月 30 日現在とするのが正しい。

注 33) 内閣官報局：職員録 明治 20(1887)年 甲(官報 1349 附録)、279～280 頁、明治 21(1888).2

注 34) 内閣官報局：職員録 明治 19(1886)年 甲(官報 1049 附録)、32～33 頁、 前掲

注 35) 参考文献 3) 43 頁

注 36) 工学会：明治工業史建築篇、171 頁、前掲。郵政省：郵政百年史資料 27、41 頁、前掲。前書では建築年代を“明治十年頃”とするが、後書では “完成 明治 20.12.- (推定)”とあり、本稿では後書によった。

注 37) 工学会：明治工業史建築篇、158 頁、前掲。郵政省：郵政百年史資料 27、28 頁、前掲。後書で設計は林忠恕とされる。

注 38) 工学会：明治工業史建築篇、172 頁、前掲

注 39) 内閣官報局：官報、明治 22(1889).5/14、1 頁

注 40) 藤森照信：日本の建築 明治大正昭和 3、172 頁、昭和 54(1979).2、 では“この頃、江戸橋郵便局設計。辰野案を、佐立七次郎、そして片山東 熊が修正して、明治二十二年五月竣工。”とする。また、この建物について は日本郵政株式会社：郵政建築 通信からの軌跡、74 頁、平成 20(2008).12、 において“当初は佐立七次郎が設計する予定であったが、欧米出張と重な ったため片山東熊(1854～1917)に設計を委託した。”とする。

注 41) 金城新聞社：金城たよ里、明治 20(1887).4/27、2 頁

注 42) 金城新聞社：金城たよ里、明治 21(1888).1/5、2 頁。“技手来名 通 信省三等技手佐立二郎氏は頃日豊橋より当区へ来られ栄町山田屋とも方に 投宿中なり”とある。なお、正確には三等技師佐立七次郎“である。

注 43) 金城新聞社：金城たよ里、明治 21(1888).2/7、3 頁。“野口属の送別 会 頃日中当区通信管理局新築工事の爲め本省より出張せられたる野口属 は昨六日は最早御用済に付全日当区を出発せられたるに付其前々日得月楼 に於て局員より送別会を開かれたる由又右野口属は帰京後は横浜郵便電信 局の工事を擔任の筈なりと聞けり”とある。

注 44) 渡辺謙：演説 震災実地調査報告、工学会誌 122、60～64 頁、明治

25(1892).2

注 45) 引用末尾の小規模な煉瓦造の建物は、中央防災会議災害の教訓の継承 に関する専門調査会：1891 濃尾地震報告書 付録、ogaki002.jpg、平成 18(2006).3、に示されるものと考えられる。

注 46) 佐藤勇造：地震家屋、26 頁、明治 25(1892).4

注 47) 日本建築学会：近代日本建築学発達史、419 頁、昭和 47(1972).10。な お、これを記す資料 3-2・31 では、明治 20(1887)年の欄に“(建築名) 名古屋郵便電信局、(所在) 無記載、(設計者) 佐立七次郎、(施工者) 直宮、(備考) M.24.10 濃尾”、明治 21(1888)年の欄に“(建築名) 名古屋郵便電信局、 (所在) 無記載、(設計者) 佐立七次郎、(施工者) 無記載、(備考) 濃尾地 震で大破”とあり、施工者名に混乱があり、記載の根拠は示されない。

注 48) 共同印刷会社：扶桑新報、明治 20(1887).1/26、3 頁

注 49) 田中豊輔：震災地実況報告、建築雑誌 61、7 頁、明治 25(1892).1

注 50) 共同印刷会社：扶桑新報、明治 20(1887).1/27、3 頁

注 51) 白崎五郎七、白崎敬之助：日本全国商工人名録、822 頁、明治 25(1892).4、 に岐阜市中新町“岐阜物産会社”があるものの関係は明らかでない。

注 52) 金城新聞社：金城たよ里、明治 20(1887).12/10、3 頁

注 53) 社史発刊準備委員会：大成建設社史、67～69 頁、昭和 38(1963).1

注 54) 参考文献 1) 3 頁

注 55) 参考文献 1) 28 頁

注 56) 金城新聞社：金城たよ里、明治 10(1887).9/23、2 頁。“○工夫の負傷 昨廿二日午後五時半頃当区栄町に新築中なる通信省管理局の練瓦建造物上 に掛けある足代が如何なる始末にや損じ場の出来しより足代板は中辺より 引裂けしにぞ全所に居たる工夫三名は忽ち数間もあるべき高みより大地に 転落し何れも負傷したるにぞ内二名は直ちに県下葉栗郡浅井村森林林平方 へ差送り療治したる由但し右の工夫は名古屋建築組の者なりと云へり”と ある。

注 57) 扶桑新聞社：扶桑新聞、明治 23(1890).11/21、4 頁、によれば、從來 あった橋町から上園町 2 丁目へ便宜のため転居した。

注 58) 白崎五郎七ほか：日本全国商工人名録、742 頁、明治 25(1892).4

注 59) 金城新聞社：金城たよ里、明治 20(1887).4/9、2 頁、には“建築組会 社 当区橋町服部小十郎氏外三四名が発起にて今度建築組会社と云へるを 設立する由なるが其資本は十萬円にして既に其筋へ許可を得しかば近々設 立するの計画なるよし”、同じく明治 20(1887).4/12、3 頁、には“建築組 当区橋町服部小十郎木挽町鈴木惣兵衛全町伊藤彦八郎其他の諸氏が発起に 関する建築組は其本店を橋町二丁目十三番地に設立せらるゝ由今又該組が 營業の目的を聞くに煉瓦石造家屋建築を第一とし其他日本形家屋建築及び 土木一切の受負をすると云ふ且該組の役員は株主中より投票を以て頭取一 名副頭取二名取締人三名支配人一名を撰挙するの筈なる由に聞けり”とあ る。いずれも“名古屋建築組”とはないが、“建築組”とあることから、こ れが“名古屋建築組”の設立を示すものと考えられる。

注 60) 白崎五郎七ほか：日本全国商工人名録、731 頁、前掲

注 61) 内尾直二：人事興信録 初版、114 頁、明治 36(1903).4

注 62) 共同印刷会社：扶桑新報、明治 20(1887).1/27、3 頁

注 63) 共同印刷会社：絵入扶桑新報、明治 20(1887).6/26、2 頁

注 64) 共同印刷会社：絵入扶桑新報、明治 19(1876).12/18、2 頁

注 65) 岐阜県：岐阜県統計書 明治 25(1892)年版、明治 27(1894).5。同書 399 頁以後に、この年の版より“在監人作業延人員及工錢”、400 頁以後に“囚 人衣食ヲ償フ工錢ヲ得ル現人員”とする表があり、ここに“作業”として “瓦工”の項目はあるが、煉瓦の項目はない。但し、同書 396～297 頁の“在 監人罹病者ノ役業ニ対スル病症類別”によれば“役業”の覽に“煉化製造” の 3 人を確認できる。そのため、岐阜県監獄署では明治 25(1892)年の段階 で瓦の製造は行われたが、既に煉瓦の製造は行われなかったと判断できる。

注 66) 貴族院事務局：各省所管官有財産目録 下巻、1421 頁、明治 25(1892).7

注 67) 愛知県警察部：明治廿四年十月廿八日震災写真説明書、1 頁、前掲、 にも“建築費額ハ金貳萬九千余円”とある。

注 68) 大阪毎日新聞社：大阪毎日新聞、明治 24(1891).11/9、1 頁

注 69) 参考文献 1) 3 頁

注 70) 内閣官報局：官報、明治 24(1891).11/17、192 頁

注 71) 郵政省：郵政百年史資料 27、48 頁、前掲

注 72) 郵政省：郵政百年史資料 27、56 頁、前掲

STUDY ON THE BUILDING OF THE NAGOYA POST TELEGRAPH OFFICE SUFFERED BY THE *NOBI* EARTHQUAKE

Ikuo HIRAYAMA *¹

*¹ Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

This article considered the building of the *Nagoya* Post Telegraph Office which suffered by the *Nobi* earthquake of 1891, and it is following points that become clear.

The *Yuubin Yakusyo* Office was established under the modern system for the first time at *Nagoya* in 1871 and the *Nagoya* Telegraph Office was installed in the neighboring site in 1882. And both stations were merged in 1886 and become the *Nagoya* Post Telegraph Office and are the Office which the building built in *Sakae-mati* in 1888 considered at this time. In addition, the building was considered to be completion by an estimate conventionally in January, 1888.

There was not the established theory conventionally about time of the construction start of the *Nagoya* Post Telegraph Office to treat in this report. But, according to the newspaper report, in the *Nagoya* Post Telegraph Office, the preparations for reconstruction have already begun in July, 1884. And the falsework had been already started in December, 1886, the completion ceremony was held on January 28, 1888. The designer of the *Nagoya* Post Telegraph Office was considered to be *Sadati Sitijiro* conventionally. But as for the employment to Ministry of Communications and Transportation of *Sadati* from February, 1887, Judging from progress of the construction, it is proper to think that the design of the *Nagoya* Post Telegraph Office was accomplished before the employment of *Sadati*. In addition, *Sadati* was concerned with construction control, but it can be determined to have been engaged in the construction for a long time with *Noguti Yosinobu*. The construction form of the *Nagoya* Postal Telecommunications Bureau has not been clear before, but it became clear that this work was done at the contract of the *Okura-gumi*. J. Condor reported with the *Nagoya Kentiku Kaisya* in “AN ARCHITECT’S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891.”, and I confirmed the construction of the company from a newspaper article. Condor did not mention the brick used for the *Nagoya* Post Telegraph Office, but it becomes clear that this used the brick made from the newspaper report in the *Gifuken Kangoku*. 1 million bricks and 200,000 pieces of roof tiles were delivered to the *Nagoya* Post Telegraph Office by the *Gifuken Kangoku*. The construction cost of the *Nagoya* Post Telegraph Office was 29,260.165 yen, and the *tsubo* unit price was 71.55 *yen*, this was low price of 6-7000 *yen* than the original budget.

(2017年12月7日原稿受理, 2018年5月22日採用決定)